

2014年度第4期ミニ企画展 2015年1月6日(火)～3月1日(日)

月岡芳年(一八三九～九二)は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師です。嘉永三年(一八五〇)、十二歳で当時の人気浮世絵師・歌川国芳に入門し、万延元年(一八六〇)頃から本格的に絵師としての活動を始めました。過激な血の表現を用いた、いわゆる「血みどろ絵」をはじめ、役者絵、歴史画、武者絵、美人画など幅広い画題に取り組み、明治へと移り変わる激動の時代の中で、鮮烈な作品の数々を生み出しました。

月岡芳年(一八三九～九二)は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師です。嘉永三年(一八五〇)、十二歳で当時の人気浮世絵師・歌川国芳に入門し、万延元年(一八六〇)頃から本格的に絵師としての活動を始めました。過激な血の表現を用いた、いわゆる「血みどろ絵」をはじめ、役者絵、歴史画、武者絵、美人画など幅広い画題に取り組み、明治へと移り変わる激動の時代の中で、鮮烈な作品の数々を生み出しました。

本展示では、芳年の晩年の代表作『月百姿』と『新形三十六怪撰』をご紹介します。この時期の芳年は、錦絵の揃物を次々と発表しながら、新聞挿絵にも活動の幅を広げていきます。明治十八年(一八八五)には『東京流行細見記』の浮世絵師人気番付で第一位となり、名実ともに浮世絵界の頂点に立つ存在となりました。

そのような中で制作された『月百姿』と『新形三十六怪撰』は、晩年の集大成といえる二つのシリーズです。いずれもダイナミックな構図の中に、ぼかしや淡い色彩が散りばめられ、歴史上の伝説や怪奇物語が幻想的に描き出されます。芳年が最後に到達した怪しくも美しい物語世界を、ぜひ堪能ください。

【凡例】
★ 作品保護のため、会期中展示替えを行います。
前期… 1月6日(火)～2月1日(日)
後期… 2月3日(火)～3月1日(日)
★ 大判は約390×260mmです。

『月百姿』

明治十八年(一八八五)～九二
大判錦絵(木版多色)

『月百姿』は、月にまつわる和漢の物語や伝承、和歌、謡曲を題材にした百枚の揃物です。版元秋山武右衛門により約八年かけて出版されました。画題は、日本武尊や坂上田村麻呂、弁慶や芭蕉ら歴史上の人物から、孫悟空や『竹取物語』のかぐや姫、『源氏物語』の夕顔といった架空の登場人物まで、多岐にわたります。それぞれに空摺やぼかしの技法を凝らし、見るものを飽きさせません。古代から江戸時代まで、時代を超えて様々な登場人物に寄り添う、ヴァリエーション豊かな月の姿もみどころです。



『月百姿』より「朝野川晴雪月 孝女ちか子」

◆前期展示(1～50)

- 1 君は今駒かたあたりほとゝきす たか雄
- 2 祇園まち
- 3 嫦娥奔月
- 4 南屏山昇月 曹操
- 5 名月や畳の上に松の影 其角
- 6 史家村月夜 九紋竜
- 7 稲葉山の月
- 8 月下の斥候 齋藤利三
- 9 朝野川晴雪月 孝女ちか子
- 10 四條納涼
- 11 雨後の山月 時致
- 12 吉野山 夜半月 伊賀局
- 13 から衣うつ音きけは月きよみ
- 14 またねぬ人を空にしるかな 経信
- 15 大物海上月 弁慶

月輝如晴雪 梅花似照星
可憐金鏡転 庭上玉房馨 菅原道真

(月輝きて晴れたる雪の如く 梅花照る星に似たり
憐れむべし金鏡転じ 庭上玉房に香れるを)

山城 小栗栖月

月夜釜 小鮎の源吾 嶋矢伴蔵

朱雀門の月 博雅三位

信仰の三月月 幸盛

いつくしまの月 室遊女

烟中月

竹生島月 経正

源氏夕顔巻

つぎのかつら 吳剛

卒都婆の月

山木館の月 景廉

廓の月

破窓月

鶏鳴山の月 子房

北山月 豊原統秋

神事残月

心観月 手友梅

音羽山月 田村明神

高倉月 長谷部信連

銀河月

垣間見の月 かほよ

はかなしや波の下にも入ぬへし

つき之都の人や見るとて 有子

しはるまちの暁月

きよみかた空にも関のあるならば

月をとゝめて三保の松原

しら／＼としらけたる夜の月かけに
雪かきわけて梅の花折る 公任

やすらはて寝なましものを小夜ふけて

かたふく迄の月を見しかな

稲むらか崎の明ほの月

朧夜月 熊坂

盆の月

賊巢の月 小碓皇子

淮水月 伍子胥

田毎ある中にもつらき辻君の

かほさらしなや運の月かけ 一とせ

舵楼の月 平清経

五節の命婦

◆後期展示 (51 ~ 100)

鳶巢山暁月 戸田半平重之

住よしの名月 定家卿

西宮夜静百花香 欲捲珠簾春恨長

斜抱雲和深見月 朧々樹色隠照陽 王昌齡

(西宮夜静かにして百花香し 珠簾を捲かんと欲して

春恨長し 斜めに雲和を抱きて深く月を見れば

朧々たる樹色 昭陽を隠す)

名月や来て見よかしのひたい際 深見自休

常にこそ曇もいとへ今宵そと

おもふは月の光なりけり 玄以

読書の月 子路

ほととぎすなをも雲ぬに上るかな

頼政とりあへす 弓張月のいるにまかせて

月明林下美人来 (月明らかにして林下美人来る)

月宮迎 竹とり

五條橋の月

悟道の月

原野月 保昌

あまの原ふりさけみれば春日なる

三笠の山に出し月かも

堅田浦の月 斎藤内蔵介

南海月

世尊寺の月 少将義孝

志津か嶽月 秀吉

貞観殿月 源経基

月のものくるひ 文ひろけ

孝子の月 小野篁

赤壁月

忍岡月 玉渚斎

雨中月 児嶋高德

足柄山月 義光

宮路山の月 師長

石山月

玉兔 孫悟空

千代能がいたく桶の底抜けて

みつたまらねは月もやとらす

おもひきや雲の秋のそらならて

竹あむ窓の月を見んとは 秀次

霜満軍営秋気清 数行過鴈月三更 謙信

(霜は軍営に満ちて秋気清し 数行の過鴈月三更)

弓取の数に入るさの身となれば

おしまさりけり夏夜月 明石儀太夫

きぬたの月 夕霧

孤家月

かしこまし野もせにすたく虫の音よ

我たになかくものをこそおもへ

金時山の月

たのしみは夕顔たなのゆふ涼

男はてゝら女はふたのして

法輪寺の月

花山寺の月

雪後の暁月

調布里の月

つきの発明

月の四の緒

三日月の頃より待し今宵哉

桜さくすみたの川にこくふねも

くれて関屋に月をこそ見れ

嵯峨野の月

姥捨月

梵僧月夜受桂子

むさしの月

猿楽月

いてしほの月

『新形三十六怪撰』

明治二二年〜二五年（一八八九〜九二二）

大判錦絵（木版多色）

『新形三十六怪撰』は、日本古来の伝説に登場する幽霊や妖怪を描いた三十六図の揃物です。版元佐々木豊吉により、全三十六点と目次一点が出版されました。

慶応元年（一八六五）に『和漢百物語』を描いて以来、妖怪は芳年の主要なテーマのひとつとなりました。その集大成ともいえるこの揃物では、おなじみ「番町皿屋敷」のお菊や、土蜘蛛、鶴といった幽霊・妖怪が登場し、時には、人間との緊張感あふれる対決の場面を繰り広げます。虫食いやデザインされた画面の枠も、おどろおどろしい雰囲気を一層深めています。

芳年は明治二四年（一八九二）、神経の病に罹り、翌年五十四歳で世を去ります。『新形三十六怪撰』は彼の遺作となりました。題にある「新形」は「神経」と掛けてあり、当時神経の病に罹っていた芳年自身を暗示しているともいわれています。

◆前期展示（1〜18）

- 1 貞信公夜宮中に怪を懼しむの図
- 2 さぎむすめ



『月百姿』より「玉兔 孫悟空」

◆後期展示（19〜36）

- 19 布引滝悪源太義平霊討難波次郎
- 20 葛の葉きつね童子にわかるゝの図
- 21 仁田忠常洞中に奇異を見る図
- 22 清盛福原に数百の人頭を見る図
- 23 奈須野原殺生石之図
- 24 秋風のふくにつけてもあなめくをのとはいはずき生けり

業平

- 3 武田勝千代月夜に老狸を撃の図
- 4 大森彦七道に怪異に逢ふ図
- 5 清玄の霊桜姫を慕ふの図
- 6 老婆鬼腕を持去る図
- 7 鬼若丸池中に鯉魚を窺ふ図
- 8 小町桜の精
- 9 為朝の武威痘鬼神を退くの図
- 10 内裏に猪早太鶴を刺図
- 11 清姫日高川に蛇躰と成る図
- 12 蒲生貞秀臣士岐元貞
- 13 甲州猪鼻山魔王投倒図
- 14 鐘馗夢中捉鬼之図
- 15 地獄太夫悟道の図
- 16 藤原実方の執心雀となるの図
- 17 平 惟茂戸隠山に悪鬼を退治す図
- 18 皿やしきお菊の霊
- 19 藤原秀郷竜宮城蜈蚣を射るの図



『新形三十六怪撰』より「源頼光土蜘蛛ヲ切ル画」

- 36 おもゐつゝら
- 35 四ツ谷怪談
- 34 茂林寺の文福茶釜
- 33 節婦の靈瀧に掛る図
- 32 源頼光土蜘蛛ヲ切ル図
- 31 今宵の月は空にこそあり 宗祇
- 30 やとるへき水も氷にとぢられて
- 29 二十四孝狐火之図
- 28 大物之浦ニ靈平知盛海上ニ出現之図
- 27 小早川隆景彦山ノ天狗問答之図
- 26 蘭丸蘇鉄之怪ヲ見ル図
- 25 三井寺頼豪阿闍梨惡念鼠と変ずる図

◆参考資料―芳年作品の源泉―

芳年は制作にあたり、師である歌川国芳の錦絵や、菊池容斎の『前賢故実』、緑亭川柳の『秀雅百人一首』といった資料から画題や図様を参考にしています。これらと芳年の作品を見比べると、先行図様に学びながらも、鋭い感性で独自の画面構成を作り上げた芳年の技量の高さが浮かび上がります。

【前期展示】

- ① 緑亭川柳編、葛飾北斎ほか画
『秀雅百人一首』弘化五年（一八四八）
- ② 緑亭川柳編、葛飾北斎ほか画
『続英雄百人一首』嘉永二年（一八四九）
- ③ 菊池容斎編・画
『考証前賢故実』明治三六年（一九〇三）

【後期展示】

- ④ 歌川国芳
『小倉擬百人一首』より
「河原左大臣 文ひろげの狂女」
弘化三年（一八四六）、大判錦絵
- ⑤ 鈴木芙蓉
『唐詩選画本』二編 寛政二年（一七九〇）
- ⑥ 菊池容斎編・画
『考証前賢故実』明治三六年（一九〇三）

畦地梅太郎（1902～99）コーナー

1 冬の公園

1927年、鉛凸版、172 × 262 mm

2 河口湖

1941年、木版多色、238 × 335 mm

3 スキーの人

1955年、木版多色、408 × 296 mm

4 季節の山（四）

1968年、木版多色、501 × 377 mm

町田市立国際版画美術館

〒194-0013

東京都町田市原町田 4-28-1

<http://hanga-museum.jp/>

2015年1月6日発行

この冊子は3000部作成し、1部あたりの単価

は10円です。（職員人件費を含みます。）